

留学速報

Johns Hopkins Medical Institutions Department of Cardiology

先崎 秀明*

私は2年ほど前より、東大の小児科から、アメリカの東海岸の港湾都市バルチモアにあるJOHNS HOPKINS 大学医学部の循環器科で、心不全のメカニズム、循環生理について勉強させていただいています。私の専門の小児の循環器の領域においては、先天奇形に伴う外科治療周辺が話題の中心にあり、循環生理の分野は軽視されがちな傾向にありますが、循環器に限らず小児一般をみるにおいて、この分野は非常に重要な位置を占め、治療を考える上でなくてはならない分野であると考えています。留学先を探すに当たっては、岡山大学の菅先生にご相談にのって頂き、先生がかつて留学されていて、Emax, PVA-心筋酸素消費関係で知られる心臓力学、エネルギー論において画期的な仕事をされた同大学を紹介していただきました。実のところ、私は菅先生とはまったく面識がなかったのですが、図々しくも突然お電話を差し上げたところ、快く相談にのって頂き、いわば先生の“後輩”にあたる Dr. Kass を紹介していただきました。今回、循環制御誌のこの欄も、菅先生からのお声で書かせて頂くことになりましたが、私がこちらに来ていままでも過ごした2年間に見て感じた、私の周辺のアメリカ事情種々雑多について紙面を使わせていただきたいと思います。

BALTIMORE チェサピーク湾でとれるカニと野球のバイブルース、それと全米第2位の規模を誇る水族館で有名なバルチモアは、ワシントンDCの北50マイル(車で1時間弱)にある人口約80万の中規模都市である。それでも中心部から高速で10分も走れば、そこら中が北海道といった感じで、アメリカの広大な国土を感じる。残念ながら、市

内は治安は決していいとはいえず、地方新聞には“警察事件簿”のような欄があり、ほとんど毎日、強盗や発砲事件の報告がでている。市内の南部に位置する HOPKINS の病院自体はセキュリティーがしっかりしていて、しかも昼間は周辺に夥しい数の警察がパトロールしているため比較的安定であるが、2ブロックも外れると犯罪多発地区で、私の友人は、幸か不幸か発砲事件にでくわした。私も路駐しておいた車の鍵をあげられ、中におい

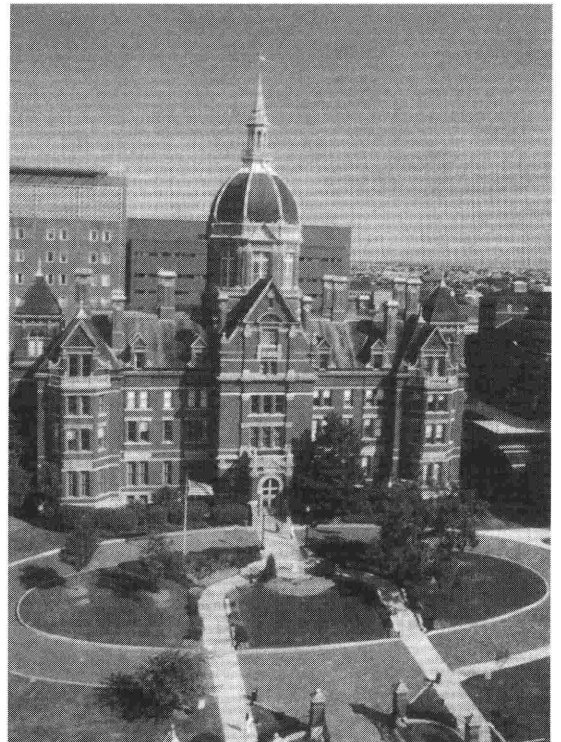


写真 Johns Hopkins Medical School

*東京大学医学部小児科

であった小物類をさらわれた。さらわれたのが私でなかったのが不幸中の幸いだ。危ない時間に危ない場所を出歩かなければそう大きな間違いは無いようだが、危ない時間や危ない場所がほとんど無い日本は素晴らしい国であると改めて感じる。それは、治安状態の意味する背景には、貧困とそれに結び付く無教育という問題があるからで、アメリカの自由がもたらした精鋭達、成功者達の対局にこうした問題があることを、今のアメリカは今よりもっと真剣に考え取り組んでいかなければならないと痛感する。

HOPKINS アメリカでは面白いことに、毎年ある雑誌社が全米の病院のランキングを発表する。**HOPKINS** は、ここ6年間1位の座を保持しており、**CARDIOLOGY** も常にベスト10に入っている。その背景には豊富な人材に支えられる診療、研究体制の層の厚さのようなものを感じる。**CARDIOLOGY** だけでも臨床系基礎系合わせ8人の教授群と、約30人の講師以上のスタッフが、各々独立して研究を行っている。独立は、排他や秘密主義を意味せず、研究室間で常に意見や情報の交換が行われ、必要であれば共同体制で研究が行われている。30人以上のスペシャリストが揃えば、ほとんどの循環器の分野がカバーされるのは必然で、いつでもその意見が聞け協力が得られるのは羨ましい環境である。しかもそのスタッフは必ずしも母校の卒業生ではなく全米の至るところから選ばれやってくる。日本にはなかなかない、しかしながら本来あるべき姿のような気がする。週に1回は、昼休みの時間を利用して、アメリカの典型的昼飯スタイルであるサンドイッチとコーラ、そしてポテトチップスを頬張りながら、各研究室の研究内容を発表し、討論する場が持たれ、時に激論を交わしあう。私の研究室のポストも必要があれば、時に他施設にも協力を求めて研究を行っている。研究には当然の事として個人間、施設間の競争が生まれ、それはお互いをレベルアップし、ひいてはよい成果をもたらすが、我々の最終の目的は個人や施設の成果をあげるのではなく、病気の解明克服にあることを考えれば、実に効率的で望ましい姿勢であるような気がする。更に、よく知られた事実であるが、研究を支える資金の面でのバックアップも日本と比べ桁違いに大きい。問題解決とそのための優れた研究には金を惜しまないとい

う国の徹底した政策方針が伺える。こうした徹底した研究体制が優れた研究成果をもたらすことは当然のこのような気がする。日本の大学、特に国立は人員制限の為、優秀な人材がじっくりと腰を据え、互いに討論し、協力しあえる環境がもち難く、折角の力が分散してしまう効率の悪さを感じないではられない。問題意識と目的を再確認し、個々の能力を十分に活かせるシステム作りが、今の日本の大学医学部には是非必要であると切に感じる。

英語 多くは楽しい留学生活の中で、唯一と聞いていいかもしれない大きな苦痛がある。それは英語である。特にこちらに来た当初は、相手が何を言っているかも解らず、こちらの言いたいことも満足に伝えられず、非常に歯がゆい、そして悔しい思いを何度もした。それはまるで自分が40~50%ばかりになったような感覚である。日本人の下手な英語になれている医学関係者はこちらを配慮した英語を話してくれもするが、町中ではそうはいかない。アメリカ人は、誰もが英語を話せるのが当然と勘違いしているのか、ゆっくり話そうとしたりはっきり話そうとしたりする努力をしてくれることが少ない。日本ではアメリカ人が拙い日本語で話しかけてきたら10人が10人、解りやすいように話し方を変えるのとは大きな違いだ。留学前、多くの日本人は、2、3年アメリカにいれば英語は堪能になると考えている傾向にあるように思われるが、現実はそのあまくはないようである。帰国後英語を自由に操っているような日本人は、実は留学前から或る程度英語が話せた人々であるといまさらながら気づき、しまったと思うばかりである。しかしながら、世界の共通語は日本語ではなく、何故か英語であるという事実と、科学の場は日本国内だけではなく世界であることを考えると、自分の意思を自由に英語で伝えられることは、これからの科学者にとっては必要条件であると再認識し、残りの留学期間、少しでも英語の上達に努力したいとおそまきながら思う。

学生 アメリカの医学生は、4年間日本で言えば教養にあたる勉強をしたあと、医学部に進む。医学部入学には大学4年間のよい成績の他、推薦状が必要となる。従って大学3年にもなると、医学部を目指す学生たちは、推薦状をもらうため研究室に出入りし、講義の合間や長期休みを利用して

仕事の一部を手伝うことになる。我々の研究室にも数名の学生が働きに来ている。実に忙しそうだ。夏休みにほとんど毎日働きに来ていた学生の一人に「どこかに旅行をしたりしないのかい」と拙い英語で訪ねてみると、忙しくてそのような時間は持てないそう。彼らはその分、数学や生化学やあるいはコンピューターといった医学以外の、しかしながら後に医者として研究者としてやっていく上で大きな助けとなりうる基礎科学に実に詳しい。日本の（少なくとも私の知る限りの、しかしながらおそらく大多数の）医学生が、クラブ活動や夜の生活に忙しいのとは実に対照的である。どちらがいいかは意見のわかれるところかもしれないが、私個人としては、自分のしたいことが出来たら、いろいろな経験が出来る比較的十分な時間がある日本の医学生生活は、実に素晴らしいと思う。

中国人 アメリカには実に多くの中国人が働きに来ている。そして実に不思議なことに、彼らの多くは、帰国したがらずアメリカに残ろうとする。中国人の友人の一人に訳を訪ねてみると、第一にお金、第二に研究設備の充実をあげた。彼らは母国ではあまりお金がもらえない上に（中国の一般的医者の給料は他の職業に比べてもむしろ安いぐらいだとその彼はぼやいていた）不備な研究施設

で十分自分のしたいことが出来ないのだそう。裕福な日本を実にありがたいと思う。蛇足だが、中国人は日本人より遙かに英語がうまく上達も早い。

この2年間で、研究の面自体でもより広い角度からより深く問題を考える時間が持てたような気がします。さらに研究をどうデザインしどう実行するか、それをどう解りやすく“英語”で提示するかなど、いわば技術の面でも多くを学ばせていただきました。これらはわたしが帰国後研究を続けるに当たり大きな財産になると考えます。それと同時に、あるいはそれ以上に、ある意味においては世界をリードするアメリカが持つ優れた点、同時に抱える問題点を、日本と対比して自分なりに少しでもみて考えることが出来たことが、私にとっての最大の財産になったと思います。そして何よりもこのような貴重な機会をくださった東大小児科教室の柳澤教授、循環器の菱先生をはじめご援助をくださった医局の先生方、そして留学先のお世話をしていただいた菅先生に心から感謝を致したいのと同時に、これからも多くの方が自国とは違う世界をみる機会が得られ、何かを見て、それが医学そして社会を動かす大きな力になればと切に思うこの頃です。